

参 考 文 献

- | | |
|--------------------|-----------------|
| Otto Jespersen | 英語の生長と構造 |
| Otto Jespersen | 言語（その本質・発達及び起源） |
| Fernand Mossé | 英語史概説 |
| Leonard Bloomfield | 言語 |

文責 萩 田 時 子

現代英語における

否 定 表 現 の 一 考 察

那 須 博 之

発話や思考の基本的な要素である否定の概念とは、どのようなものであろうか。その表現に含まれた種々多様な否定概念の語相を追求し、ひとつの形にまとめ上げようとする意気込みで私は論文にとりかかったが、できあがって残されたものは、目を覆いたくなるような代物であった。もともとテーマの選択を誤ったのではないかと、私は思っている。短期間で扱うには大き過ぎ、しつかりと捉えるには焦点を合わせるのが困難過ぎるであろうから。いま考えてみて、あれ以外にどうしようもなかったと自身に言い聞かせてみても、時と共に悔いは大きくなる一方のようである。

ところで、否定 (negative) は肯定 (positive, affirmative) の対立概念であるが、数字のいわゆる <positive-negative> の概念とはかなり意味合いが異なっている。〔-1〕というのは〔1〕以外のすべてを意味しないし、また〔1〕以下という意味でもない。それは数直線上において〔0〕を規準とした〔1〕の対称点であるに止まる。

ところで〔unhappy〕は（幸福であること以外のすべて）を意味し、〔not four〕は多くの場合、〔4以下〕（例えば、I don't have four meals a day）の意味となるのである。

<happy-unhappy>, <possible-impossible> 等のように矛盾する概念をあらわす対応を論理学者は矛盾事項と呼ぶ。矛盾事項は二つ合わさると、存在するすべてを包含する。このような概念をあらわすのに、言語では、否定的接頭辞を前接した派生語、あるいは

は副詞 not を含む合成表現（例えば rich に対する not-rich）を一般に用いる。一方 <rich-poor>, <white-black> のような組みあわせの対応語によって表現されるのが反対辞項である。二つの反対辞項は、その中間に、一つあるいはそれ以上の中間項を容認する。この反対概念を表わすには、普通、全然別の語が用いられる。

Jespersen によれば、「言語的否定は、一般的に言っている辞項を矛盾辞項に変える」のであるが、先にのべた <not four> のような例外が多くあることも事実である。同じ例を更に掲げれば <not good> は <excellent> ではなく <inferior> を意味する。

次に私は「三区分法のいくつか」に従って、

A. all

B. some $\left\{ \begin{array}{l} B_1 \text{ many} \\ B_2 \text{ a few} \\ B_3 \text{ few} \end{array} \right.$

C. none

について考察し、それぞれ否定がどのような意味になるかを見ていった。

否定概念が、どのような表現形式を取るかという問題も、また興味深いものである。私は、否定が表現の前面に形を取って現われた文にではなく、肯定形の疑問文関係や、ifに導かれる条件節、また、hell, deuce 等の間接否定詞を使用した意味の深い文例に多くの興味を持った。

私は、英語における否定表現の歴史を見たあと、以上の問題を扱い、その後「特殊否定とネクサス否定」「否定索引」「二重否定」「さまざまな問題」を記述して、78ページに収めた。尚、主要参考書目は以下の通りである。

英語の否定表現	O. Jespersen H. Marchand	渡辺 茂 訳述	英 語 学 ライブラリー(57)
文法の原理	O. Jespersen 半田 一郎 訳		岩 波
エッセンシャル英文法	O. Jespersen 中島文雄 訳		千 城
動詞文章法史的概論	B. Trnka 斉藤静雄 訳注		篠 崎
英文法論考	大 塚 高 信		研 究 社
英語意味論研究	毛 利 可 信		研 究 社
文法の原理	中 島 文 雄		研 究 社
語法・語順・否定			大 修 館 Q-B series

語 順

現代口語文法

Vorlesungen über Syntax II

毛 利 可 信

原 沢 正 喜

J. Wackernagel

英文法シリーズ (23)

現代英文法講座
(研究社) (7)

Birkhäuser
(Basel)

(文責 本人)

voice 研 究

原 野 昇

Paul killed John. と John was killed by Paul. とは少くとも客観的事実については同じことを表わしている。それ故、言語が伝達の機能を最大限度に果たするためには、これらのうちのどちらか一方の言い方があれば足りるはずである。それにもかからず、今日の多くの言語には能動・受動の両方の表現方法があるのは何故だろうか、というようなことから“voice” (相) とは何か、それはどのような文法的範疇をなしているのだろうかをみようとした。

まず今日の英語の受動相を中心に、その様々な使用について全部を受動相と呼んでよいかどうか、よいとすれば何を基準にしてそう言えるか、また同じ受動相内における意味・用法その他の差はどこに存するかを検討し、次に受動相の発生などを歴史的にあるいは二三の言語を比較対照し、「相」というものの何たるかをみようとした。

ひき出された結論は多分に抽象的かつ主観的で、その方法とともに再考の余地はあるが、「相」というものの自身が大いに主観的なものであるということとは言えると思う。それは受動相存在の大きな理由の一つでもあるが、話者が動作を受けたものの方により多くの関心をよせ、またその方向性のある動作の方により多くの注意を向けている場合に受動相が用いられ、それは個人によって異なる主観的なものであるからである。それが Someone killed John F. Kennedy とともに、かつまた John F. Kennedy died. とともに、John F. Kennedy was killed. という表現が存在する大きな理由である。

参 考 書

L. Bloomfield : Language